

ポルトガル語の関係詞節表現における叙法選択についての考察

鳥越 慎太郎

1. はじめに

ポルトガル語に限らず、ロマンス諸語の関係詞節内の叙法選択の研究で議論されるのは、多くの場合先行詞の意味の特定性や指示性といった問題である。一方で、叙法とモダリティの研究の多く (e.g. Bybee, Perkins, & Pagliuca 1995; Givón 1994; Palmer 2001, 和佐 2005) で焦点となっている *Realis* と *Irrealis* の対立のような従属節 (命題) の問題について触れられることは少ない。関係詞節内の叙法は果たして何を規定しているのか。本稿では先行詞の性質に限らず、命題の内容にも着目していくことで、ポルトガル語における新たな関係詞節内叙法選択の仮説を模索していく。

2. Comrie & Holmback (1984)

ポルトガル語における関係詞節内叙法選択について詳細に記述説明している事例として、Comrie & Holmback (1984) が挙げられる。同研究では接続法未来を用いる表現を主題に、関係詞節における直説法現在と接続法現在の対立と接続法現在と接続法未来の対立の二点を検証し、各動詞形態素が選択される状況における先行詞の特徴についてまとめている。関係詞節内の直説法現在と接続法現在の対立は以下のよう

- (1) José quer casar com a mulher que tem muito dinheiro. (ジョゼはお金持ちの女性と結婚したがっている)
- (2) José quer casar com uma mulher que tenha muito dinheiro.
- (3) José quer casar com uma mulher que tem muito dinheiro.

(以降(8)まで Comrie & Holmback (1984) より、下線、訳は筆者による)

特定の名詞を修飾する場合は直説法(1)、不特定の名詞を修飾する場合は接続法(2)という対立構図である。ただし、この対立は定・不定冠詞の有無といった形式的な区別だけによるものではなく、指示される情報の対象が実際に存在し、かつ聞き手に対しても共有されている情報であるのか、それとも実際には存在しないものなのかといった概念的な区分である。形式的には不定冠詞を伴う不特定の表現であっても、その内容が特定のであれば関係詞節内では直説法を用いる(3)。Comrie & Holmback は形式的な対立との混同を避けるため、*specific* や *definitive* といった用語を嫌い、*referential* (指示的) と *non-referential* (非指示的) という用語によって対立させている。

次に、Comrie & Holmback は接続法現在と接続法未来の対立について説明している。接続法未来は関係詞節においては非指示的かつ一般的・普遍的に解釈される名詞句を修飾する場合においてのみ出現する形態

素である。すなわち、接続法現在と接続法未来の対立はそのような一般的表現においてのみ起こる。接続法現在によって表現される一般的表現は、先行詞が不定冠詞を伴う場合(2)、主節で目的語となっている無冠詞名詞を修飾する場合(4)のような二つのタイプである。

(2) José quer casar com uma mulher que tenha muito dinheiro.

(4) José gosta de mulher que seja rica. (ジョゼは豊かな女性が好きだ)

一方、接続法未来を要求する一般的表現は広く、定冠詞を伴う名詞(5)、主節で主語となっている無冠詞名詞(6)、非語彙先行詞 (*o que, qualquer um que* など)(7)、無先行詞関係代名詞 (*quem*)(8) と共起する。また、これらは直説法現在とも共起する。

(5) José quer casar com a mulher que tiver muito dinheiro.

(6) Mulher que for rica não tem que ser bonita. (豊かな女性は美しいわけではない)

(7) Farei o que eu puder. (できる限りのことをしよう)

(8) Quem chegar atrasado fica lado de fora. (遅れて着く人は外に出される)

Comrie & Holmback は指示・非指示の二項対立に定・不定冠詞表現、一般表現といった要素を考慮することで、直説法各形式 vs 接続法現在 vs 接続法未来という三つの対立構造を示唆している。以下、少々単純化されているが、Comrie & Holmback の説明を視覚的にとらえやすいよう表 1 にまとめる。表内の点線部分は一般的解釈が直説法表現でも可能なことを示す。

表 1 Comrie & Holmback (1984) による関係詞節内叙法選択の説明のまとめ

先行詞の性質 先行詞句の形式	指示	非指示	
		一般的解釈	不特定の・非現実的解釈
定冠詞	直説法	接続法未来	
無冠詞、無先行詞など		接続法未来(接続法現在)	
不定冠詞		接続法現在	

3. 叙法とモダリティの各先行研究

Comrie & Holmback (1984) は関係詞節内の叙法と先行詞の関係を的確にまとめているが、論点は先行詞の指示性や特定性であり、従属節内(命題)の性質は考慮されていないといえる。

Realis と Irrealis の対立、あるいはそれに準じる概念を援用している各言語の、あるいはより一般的な叙

法とモダリティに関する意味論的研究に目を通してみると、Terrell & Hooper (1974) や Palmer (2001)、Bybee, et al. (1995) では関係詞節における叙法選択はまったく、あるいはほとんど言及がなされていない。また、Givón (1994) や Haverkate (2002)、和佐 (2005) では、いずれも「先行詞の Realis/Irrealis」の問題として扱われている。一方で Panzeri (2006) や Becker (2010) は、接続法現在を用いる関係詞表現は現実世界ではない可能世界・観念世界における事象を表現するとし、文脈上の意志、否定、命令、条件などの法的意味のスコープが関係詞節表現を支配するとしている。なお、接続法未来の表現については、先行詞の実現性の判断は差し控えられるとされ、法的意味スコープに関して中立であるとされる (Becker *ibid*)。

4. 命題とモダリティ

4.1. 関係詞節表現の命題とは

命題とモダリティ、命題の Realis/Irrealis というテーマを扱うにあたって、関係詞節表現における命題とは何を指すのかを考察しなければならない。命題とは単に従属節を指すのであろうか。すると命題に対するモダリティとは関係詞節の場合は何が当てはまるのだろうか。スペイン語文法において命題とモダリティの観点から叙法を研究する福駕 (1990) や和佐 (2005) では、関係詞節における命題が定義されていない。また、英語において文を組み立てる概念として *proposition* と *modality* を提唱する Fillmore (1968) でも、関係詞節表現の例文は示されていない。福駕や和佐に影響を与えた日本語文法の益岡 (1987) を参照すると、命題とは客観的事実を、モダリティとは話者の態度を表す箇所であると規定されるが、命題要素の範囲は明瞭ではなく、中間的な存在がしばしば障害になるとされる(p. 9)。関係詞節とはまさにこの中間的な存在ではないかと考えられる。加えて、この命題の規定の不明瞭さが、多くの関係詞節表現における叙法選択の議論を先行詞の特徴への言及にとどめている一因ではないかと考える。

4.2. 命題めあてのモダリティと一次的・二次的モダリティ

それでは関係詞節における命題とモダリティをどうとらえればよいのか。これに対する手がかりとして益岡 (1991) や仁田 (1991) が日本語文法で提唱、議論し、そして和佐 (2005) によってスペイン語文法への応用がなされた二段構えのモダリティのカテゴリーと、益岡 (1991) の「一次的モダリティ・二次的モダリティ」を参考にしたい。

和佐 (2005) では益岡や仁田の各研究に加え、スペイン語で同様の枠組みを提唱している各研究を踏襲し、モダリティを「発話・伝達のモダリティ (*modalidad de la enunciación*)」と「命題めあてのモダリティ (*modalidad del enunciado*)」に分類している。発話・伝達のモダリティは「述べ立て」、「疑問」、「働きかけ」、「表出」、「感嘆」の「伝達機能」と、「丁寧」からなる発話全体の機能の類型に関するものである。一方で命題めあてのモダリティは「真偽判断」(9)、「感情・評価」(10)、「当為判断」(11)といった発話された内容(命題)に対するとらえ方に関するものであり、命題の Realis と Irrealis が叙法や主節動詞語彙に反映される。

- (9) Creo que María está en casa. (マリアは家にいると思います)
- (10) Me alegro que vengas mañana. (私は明日君が来ることがうれしい)
- (11) Te ordeno que te marches. (私は君が行くことを命令する(逐語訳))
- (和佐 (2005) より)

発話・伝達のモダリティと命題めあてのモダリティはそれぞれ排他的ではなく、前者が後者を内包するような関係となる(仁田 1991, 和佐 2005)。例えば(9)では発話・伝達のモダリティは「述べて」、命題めあてのモダリティは「真偽判断」である。

一方、Haverkate (2002) はスペイン語の名詞節や副詞節が文レベルでのスコープを持つのにに対し、関係詞節は名詞句レベルでのスコープしか持たないと説明する。これは益岡 (1991) が主張する一次的モダリティと二次的モダリティの対立に類似する。一次的モダリティとは常に主観性を表現するより純粋なモダリティ要素である。上述の発話・伝達のモダリティは常に一次的モダリティに当たると考えられる。一方で二次的モダリティとは客観化を許すモダリティであるとされ、日本語では具体的には「～こと」のような表現、「～ない」という否定の判断の表現の内部、過去の表現で用いられる。また、二次的モダリティは一次的モダリティに意味的、構造的に支配される関係にある(12)。

- (12) 花子がどこかへ出かけるらしいことは、その時の様子でわかった。
- (益岡 (1991) より、下線は筆者による)

Haverkate の指摘に益岡の枠組みを当てはめてみると、スペイン語の関係詞節とは二次的モダリティ「～こと、人」に対する、いわば二次的な命題なのではないかと考えられる。関係詞節ではそのスコープが名詞節に限定されるのであれば、関係詞節を含む名詞節は真偽判断などの一次的命題めあてのモダリティに支配され、相対的に客観的なものとなる。先行詞の指示性・非指示性は二次的命題の Realis/Irrealis の対立に関係してくる二次的モダリティであると仮定する。図 1 は、*uma mulher que tenha dinheiro* という Irrealis の関係詞節を伴う名詞句が、*quer* という当為判断の一次的モダリティに支配される命題 *casar com uma mulher que tenha dinheiro* を構成している二次的な命題とモダリティであるという仮説を示す。

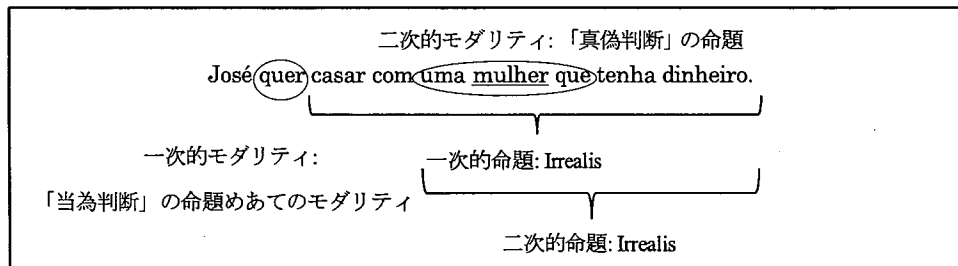


図 1 二次的モダリティと二次的命題としての関係詞節のモデル

5. 先行詞と命題、叙法の対応関係: 第四の対立要素としての直説法未来

以上、関係詞節表現では先行詞に指示と非指示、命題に Realis と Irrealis の対立があり、叙法選択に影響しているのではないかと仮定する。それでは先行詞の指示・非指示と命題の Realis/Irrealis はそれぞれどのように対応しているのだろうか。先行詞が非指示の場合は命題の内容は Irrealis となり、Comrie & Holmback (1984) が示すように、先行詞が不特定の・非現実的な場合従属節内は接続法現在 (過去)(2)、一般的表現では接続法未来または接続法現在となる(4)-(8)。一方で先行詞が指示の場合、直説法との対応関係としてひとくくりにとめている Comrie & Holmback とは異なり、筆者は命題の内容が Realis の場合と Irrealis の場合を区別し、Realis の命題内での叙法は直説法現在 (過去) が、Irrealis の命題では直説法未来 (過去未来) が用いられる(13)(14)と考える。

(13) A reestruturação da RTP é o maior problema que Sócrates irá enfrentar, ...

(RTP の再編はソクラテス政権が直面し得る最重要課題である)

(14) A vaga que Schumacher deixaria na Bennetton poderia até ser ocupada por Rubens Barrichello.

(シューマッハの移籍によって起り得たベネトンチームのドライバーの空席はルーベンス・バリチェロが埋める可能性もあった)

(Cetempúblico/Cetenfolha コーパスリより、下線は筆者による)

以上、先行詞と命題の両方に着目することで、先行詞が指示ならば命題は Realis で非指示ならば Irrealis というようには対応していないこと、そして直説法未来が直説法現在及び接続法のいずれとも異なる振る舞いを示すことがわかる。この直説法未来 (過去未来) の Irrealis 性はこれが第三叙法であるとする諸説 (cf. 拙稿 in printing) の観点から興味深いのが、その裏付けのひとつとするには不十分であり、議論は保留する。

6. まとめと今後の課題

Comrie & Holmback (1984) は、先行詞の指示・非指示の概念に、形式の定・不定、非現実的表現と一般的表現などを考慮することで、直説法、接続法現在、そして接続法未来の 3 つの選択パターンがあることを示している。本稿ではこれを踏襲しつつ、益岡 (1987, 1991)、仁田 (1991)、和佐 (2005) らを援用して命題の Realis/Irrealis の対立も考慮に加え、その結果、従属節における直説法現在、直説法未来、接続法現在、接続法未来の 4 つの選択のパターンが生じることを仮定する。

本稿で議論に至れなかった課題として、構造的、概念的に関係詞節表現のどこまでが二次的命題なのか、すなわち、先行詞を含めるのか、従属節部のみからなるのかという点が挙げられる。本稿では Haverkate (2002) の「関係詞節は名詞句レベルでのスコープを持つ」とする仮説を援用して先行詞も含めて命題として扱っているが、現時点ではこれに十分な議論や考察を行っていないことを注釈する。また、先行詞の性

質が従属節の叙法選択に影響するのか (Givón 1994)、従属節の叙法選択が先行詞の性質に影響するのか (Panzeri 2006)、文脈によってすべて同時に決定されるのかといった議論にも本稿では踏み込めていない。加えて、直説法現在と直説法未来の対立についても、より多くの客観的な用例に基づいて検証する必要がある。これらを今後の課題としていきたい。

注

1) <http://www.linguateca.pt/ACDC/>、あるいは <http://the.sketchengine.co.uk/auth/corpora/>(商用)

参考文献

- Becker, M. (2010). Mood in Portuguese. In B. Rothstein & R. Thieroff (eds). *Mood in the Languages of Europe*, pp. 179-197. Amsterdam: John Benjamins.
- Bybee, J., Parkins, R. & Pagliuca, W. (1994). *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Comrie, B. & Holmback, H. (1984). The Future Subjunctive in Portuguese: A Problem in Semantic Theory. In *Lingua*, 63. 213-253.
- Fillmore, C. J. (1968). Case for the Case. Retrieved on 2012/5/18 from: <http://linguistics.berkeley.edu/~syntax-circle/syntax-group/spr08/fillmore.pdf#search=%27fillmore%20case%20for%20the%20case%27>
- Givón, T. (1994). Irrealis and the Subjunctive. In *Studies in Language*, 18-2, 265-337.
- Haverkate, H. (2002). *The Syntax, Semantics and Pragmatics of Spanish Mood*. Amsterdam: John Benjamins.
- Palmer, F. R. (2001). *Mood and Modality, 2nd edition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Panzeri, F. (2006). Subjunctive Relative Clauses. In P. Denis et al. (eds). *Proceedings of the 2004 Texas Linguistics Society Conference*. 60-68. Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.
- Terrell, T. & Hooper, J. (1974). A Semantically Based Analysis of Mood in Spanish. In *Hispania*, 57. 484-494.
- 鳥越慎太郎 (in printing). 「ポルトガル語の直説法未来と過去未来における非直説法性について」. *ロマンス語研究*, 43, 69-74.
- 仁田義雄 (1991). 『日本語のモダリティと人称』. ひつじ書房.
- 福嶋教隆 (1990). 「イスパニア語の叙法対立に関する一試論」. *神戸外大論叢*, 41-2. 51-66.
- 益岡隆志 (1987). 『命題の文法』. くろしお出版.
- 益岡隆志 (1991). 『モダリティの文法』. くろしお出版.
- 和佐敦子 (2005). 『スペイン語と日本語のモダリティ: 叙法とモダリティの接点』. くろしお出版.